

[発行日]=1999年10月19日

[本文]

バルセロナから車で四十分のリオレ・デ・マールのホテルを定宿にして、スペインでの熱い一週間が始まった。

この街で、泥棒まがいの格好でゴソゴソやっている奴(やつ)がいたら、それはヘリデンの生徒に間違いない。たとえば下水の蓋(ふた)などに紙を押しつけ鉛筆で懸命にこすっているのも、与えられた課題のひとつなので怪しい者ではない。かといって、画題は朝・昼・夜と描き分けなくてはならないので、同じ場所を朝となく夜となくウロウロして、怪しまれても仕方がない。粘土は三つのおもしろいものを型取って、持って帰らなくてはならない。玄関の門扉などに、とりわけおもしろいものがあるのだが、それを型取りするとなると、ほとんど泥棒の気分に近い。写真のフィルムはすべて白黒なので、朝や夕暮れに大きなカメラを抱えて、じっと光の具合を待つことになる。まあ、言うなればアメリカのマイアミ・ビーチのスペイン版のような街に、へんな集団が紛れ込み、朝となく夜となく闊歩(かっぽ)し回っているという光景である。

ビーチとディスコの街に、ヨーロッパのあちこちからやって来て、長い休日を楽しんでいる。もちろん、私たちも楽しまない訳にはゆかない。となると、夜は夜で忙しい。なぜだか、スペインの夜は十二時過ぎてから盛り上がり始めるのである。

バルセロナへ行く日は朝が早い。七時半の朝食はヘリデン城と同じだが、前夜、朝まで飲んで踊っていた奴(やつ)らには、相当つらい朝である。

バルセロナは、どうだったと訊(たず)ねられても、ちょっと答えようがない。何かに触れた、という気がしないままの気分を引きずっている。二日酔いだった訳ではない。ガウディやピカソやミロを、うんざりするくらい見たはずなのに、自分の気持ちと丹念に擦(こす)り合わせて、何か沁(し)み出して来るまで待つという時間が、そこでは持てなかったせいだろう。

定宿として滞在したリオレの街が、なんといっても印象が濃い。ポーランドの学生たちにテキーラ(本来はウオツカ)のポーランド風の飲み方を伝授してもらったり、ジャーマン・ミュージック・バーで、ふらりと入って来た、あでやかな民族衣装のケニアの女性が、何時間も陶酔したように踊るのを見たりした。小さな船に乗って一人で出かけた、サンタ・クリスティーナという小さな村の教会では、結婚の宴に巻き込まれた。なんともにぎやかで、身ぶりがオーバーなスペインの人たちの満面の笑顔が、そこにあった。薄暗い堂内では、アヴェ・マリアの唄(うた)声(こゑ)が響きわたり、人々の心の襞(ひだ)に深く沁み入ってゆく様を見た。このように美しい唄声(うたこゑ)を、かつて聴いたことがない。耳をふさぎ、音の記憶を残したかった。

いずれにしても片道三十五時間のバスの旅は、なまやさしいものではなかったが、十二日間の修学旅行は、準備に一週間、仕上げと展示のために一週間と、ほぼ一月を費やしての修学のための一大イベントだった。